

エゴイストを撃て

——ドイツ学校物語論 3——

高 田 里恵子

帰ってきた幽霊

ビルマの戦場に倒れていた死体から、半透明の幽霊たちがむっくり起きあがり、南の海を渡り、列をなしてわれわれのほうに向かって歩いてくる。これは、ベストセラーとなった戦没学徒兵の手記集『きけわだつみのこえ』（1949）が、1950年に映画化されたときのラストシーンである。不謹慎を承知で言えば、歩みよってくる幽霊たちは、これもやはり反戦思想あるいは非戦決意を背負わされ、大日本帝国の南進政策と関係する島でよみがえり¹⁾、皇居を避けつつ東京の中心部をまっすぐに目ざしてやってくる水爆大怪獣ゴジラ（1954）に似ていなくもない。映画のコンセプトは、必ずしも、わだつみ会（日本戦没学生記念会）や手記集の出版元の意向に沿ったものではなかったらしいが、原作と同じようにヒット作となり、この映画の上演をつづけていくことも、いまでは、わだつみ会の仕事の一つになっているという。

異国で無念の死を死んだ兵士が帰ってくる、その死者の声を聞け、という要請と題名は、敗戦五十周年の1995年にリメイクされた映画にも受けつがれた。リメイク版では、ラガーだった学徒兵の幽霊たちが、学徒出陣壮行会の開催された神宮競技場に戻ってきて試合をするという設定になっている。しかし、世紀末日本の都会は、彼らの声をかき消してしまう喧騒に満ちており、そこで映画は幕となる。

この種の若い戦死者の帰還というイメージは、未曾有の数の戦死者を出した第一次大戦のあと、ヨーロッパ全土に広がったと言われているが、とりわけ敗戦国のドイツで決定的な意味を担った。敗戦国の「復活」を説くのはいつでも、帰ってきた幽霊たちの任務なのである²⁾。これから本拙稿で中心的に取りあげていくつもりの『ドイツ戦歿学生の手紙』(1918)、第一次大戦で戦死したギムナジウム生と大学生たちの書簡集の編者序文には、こう書かれている。

国民的自覚の秋にあたって、我々は彼ら〔戦歿学生〕の前に頭をたれて、彼らの形見に対し、彼らの戦死を空しくせしめぬことを、彼らの遺言を実現せんことを、自己と国民全体に対する不断の精進によって彼らに恥じめものとならんことを、誓うのである³⁾。

戦死者たちの遺言を実現せんとするこの決意は、ドイツ帝国の敗戦を知った歴戦の伍長の思いそのままであった。じじつ、序文は、『ドイツ戦歿学生の手紙』フォルクスアウスガベの普及版が、ナチス政権が成立した1933年の秋に出たときに新たに付けられたのである。イギリス軍の毒ガス攻撃のために、一時的に目が見えなくなって病院に収容されていた伍長は、その目に涙を浮かべて嘆いた。ユダヤ人どもの起こした革命によって故国が滅亡してしまったなんて、こんなことがあっていいのか、と。

こうして、すべては水泡に帰した。〔……〕かつて祖国を信じ、二度と帰らぬつもりで出征した何十万人全員の墓が開かねばならないのではないか。墓が開き、泥と血にまみれた、もの言わぬ英雄たちを復讐の幽霊に変え、故国へ送りこまずにはおれないのではないか。この世で男たる者が自分の民族に捧げうる最も大きな犠牲を、これほど愚弄し裏切った故国へと。こんなことのために彼らは死んだのか、あの1914年8月と9月の兵士たちは。こんなことのために、あの1914年に志願兵部隊は戦友たちのあとに続いた

のか。こんなことのために、十七歳の少年兵たちはフランドルの地に倒れたのか。〔……〕すべては、こんなことのために、浅ましい犯罪者の一群の手に祖国を渡してしまうために、生じたことなのか⁴⁾。

「復讐の幽霊」となった父王にとり憑かれたハムレットのように、この帰還した戦死者たちに促されて、これまで自分の将来にたいして漠然とした不安を抱いていた万年伍長が、いまや「自己の運命をはっきりと自覚するにいたった」。もはや、憂鬱症のデンマークの王子よろしく、あれかこれかと迷うことはない。「ユダヤ人との妥協などありえない。ただ断固として、あれかこれかを選択するのみだ。かくして、わたしは政治家になることを決心した」。現代ドイツの哲学者スローターダイクは、『わが闘争』のこの同じ部分を引用したあと、次のように言う。

これらのイメージを通して、ワイマール共和国の生きられた神話が語っている。政治は、生存者による戦没者への慰霊事業となるのだ。生還者は死者と一つの契約を結ぶ。ヒトラーは戦死者たちの仮想の遺言状を自分で書き、そのうえ強引に遺言執行人を買って出る。大地に倒れ泥のなかに沈んだ者たちは、ヒトラーのなかでよみがえり、復讐の幽霊となって、自分の民族のもとに帰ってくるのだ。彼らは泥から這い出し、純粋な理想となって故郷に帰ってくる。フランドルの地に沈むかわりに、民族派右翼の運動で突撃するのだ。ヒトラーが1939年以降に実現した電撃作戦の構想は、ほうぼうの墓が開いて、埋もれた死者たちを突撃兵としてよみがえらせるというこのイメージを演出したものである。Führer（総統・指導者）とは、心理政治学的に見れば、そのような突撃兵のひとり、戦没者の墓から送られてきた使者である⁵⁾。

さらにスローターダイクは、「戦没者の墓」という語に註をつけており、1923年にミュンヘンにつくられた無名戦士の墓に描かれている、死んだ兵士

の像が「いずれしかるべき時が来れば、また起きあがれるような格好で横たわっている」と指摘している。ここにいたると、二つの『わだつみ』映画の最後に登場する、戦死者たちが起きあがり帰ってくるという図との一致に驚かざるをえない。

この一致は偶然の一致ではないのだが、それを述べるまえに、最新の幽霊の動向について触れておこう。「新しい歴史教科書を作る会」にたいして誠実な抗議を展開している東京大学助教授高橋哲哉が、「戦争の記憶は「亡霊的」である」と主張しているのである。「亡霊」とは、一度死んだのだけれども、死んでも死にきれなくて「戻ってきたもの」なのだそうだが、高橋哲哉が挙げるのは、もちろん、ドイツ帝国や大日本帝国の兵士たちではなく、ナチス・ドイツに虐殺されたユダヤ人であり、大日本帝国の犠牲となったアジアの人々である。

犠牲者は、忘却に抗して亡霊として現われます。クロノロジーに反逆して、喪の作業をサボってはならない、と言って現われます。そしていったん現われると、繰り返し現われますし、主体にとり憑いて離れません。もう出るな、と言っても、言うことをきいてくれるとは限らないわけです。主体はこの場合、亡霊が現われるかどうか、いつ現われるのかを、あらかじめ知ることはできません。いったん現われたら、消えろと言っても消えてくれない。『ハムレット』のように主体にとり憑いて、当事者の運命をすっかり変えてしまうかもしれないのです。

とすると、アジアの戦争被害者に対して、「今頃出てきて何言ってるんだ」とか「もういい加減にしてほしい」とか、そういう人たちがいますけれども、こういう反応は少なくとも、「トラウマ記憶」に対する本質的無理解を表わしている、と言わざるをえないでしょう⁶⁾。

高橋哲哉の言葉が、ヒトラーのそれと紛らわしくならないように、「アジアの戦争被害者」に触れる段落まで書いておいたのだが、しかし、別に意地

悪な意図をもって引用したのではなく、幽霊は左右どちらの方向からも登場し、「加害者」も「被害者」も幽霊となる、もしくは幽霊にとり憑かれてしまうということを示したかっただけである。たしかに、ヒトラーも幽霊たちとともに行進したが、神軍平等兵奥崎謙三も、ニューギニアで死んだ兵士の幽霊に「ヤマザキ、天皇を撃て」と呼びかけたし、火炎瓶を抱えてひめゆりの塔に潜んでいた知念某もまた、女学生の幽霊たちの声に励まされていた。

高橋哲哉は、同じ論考の最後に、ポール・ヴァレリーの1919年の文章から、「ヨーロッパのハムレットは幾百万の亡霊を見つめている」という言葉を引いて、「彼〔ヴァレリー〕が第一次大戦の死者たちの亡霊を考えていることは間違いありません」と言っている⁷⁾。これらの「幾百万の亡霊」が、やがて、ヒトラー＝ハムレットによって占有されていった。ナチスが戦争体験を最も有効に活用した党であったことは、しばしば指摘されるが、まことに、ナチス・ドイツを支えたのは、戦争を知らない「若い世代」以上に、「我らが死者たち」であったのだ。第一次大戦と、1923年11月のミュンヘン一揆を偶然生き延びたヒトラーは、死者への負い目を、彼らを「義務の勧告者としての我らが死者たち」⁸⁾として復活させることで解消し、同時にみずからの政権の基石もしくは捨石とした。

このナチスの遺産のせいで、ヨーロッパでは、幽霊たちの処遇に関して多少は慎重にならざるをえないのだが、我が国では、東大教師の良心たる高橋哲哉にもあらわれているように、そのような躊躇は必要ない。いや、それどころか、日本にとっての、敗戦と大勢の戦死者という初体験は、第一次大戦後のドイツのそれと、どうしても似てきてしまう、とすら言えるかもしれない。あえて、第二次大戦後ではなく、第一次大戦後を問題としつつ、『きけわだつみのこえ』を再考してみることはできまいか。もっとも、わだつみの幽霊たちは「復讐の幽霊」ではなく、映画でも、わずかに、あるいはやや不気味に微笑みながら、われわれのほうに向かって歩いてくるし、ゴジラとは違って、わざわざ皇居を避けようとする深謀遠慮もないように見えるのだが。

味方同士の戦い

『きけわだつみのこえ』の最初の出版元が東大協同組合出版部（現・東大出版会）であったことから分かるように、戦没学徒兵の手記を集めるという作業は、東大を中心にして進められた。『わだつみ』の前身である『はるかなる山河に』（1947）は、「東大戦歿学生の手記」という副題をもつが、この手記集が、わずか半年の間に当時としては破格の20万部も売れ、それでは東大だけではなく、全国版を作ろうではないかということになったらしい。そして、この東大生限定版制作の契機となり、お手本ともなったのが、先に引用した『ドイツ戦歿学生の手紙』であった。

この本は、1938年11月に出た最初の岩波新書20冊のなかの一つとして翻訳出版された。岩波新書を発案した編集者は、戦後『世界』で活躍し、『君たちはどう生きるか』（1937）で知られた吉野源三郎であり、その吉野を強力にバックアップしたのが三木清と山本有三で、また『ドイツ戦歿学生の手紙』の邦訳者が、同じ年の6月に岩波文庫から『車輪の下』を翻訳出版したばかりのドイツ文学者、のちの大政翼賛会文化部長高橋健二であったことを考えあわせると、当時の自由主義と教養主義と反軍部の結節点に、ドイツ戦没学生の幽霊たちが出たことがよく分かるだろう。むろん、ドイツではすでにナチス政権が定着していたので、我が国ではそうだった、という限定がつく。

そもそも、第一次大戦中から集められ1918年に出版された『ドイツ戦歿学生の手紙』は、若々しいナショナリズムにあふれる内容ではあっても、ナチス的思想と直接にはつながらないものであったが、すでに述べたように、1933年秋、ナチスを称える内容を含む新たな編者序文が加えられて普及版が出された。栄えある岩波新書第一号となったのは、ナチスの幽霊電撃作戦に総動員された、この普及版である。そして、吉野源三郎の主張では、岩波新書じたいは、当時の神がかり的国粹主義や軍国主義、中国への侵略を批判する資料を提供しようという意図のもとに創刊された。「もちろん、時勢が時勢ですから、このような考えを正面から主張して叫んでも、そんな出版物は国民の手に渡る前に警察に押さえられて、著者も出版者もともにつぶされて

しまうばかりです。〔……〕そのためには、この双書に入れる本のヴァリエティーや組合わせ、著者の顔ぶれに、特別な苦心がありました」⁹⁾ というわけなのである。この事情のもとでなら、『ドイツ戦歿学生の手紙』は、岩波新書にまことにふさわしい複雑な振れをもっていたのかもしれない。すでにナチス・ドイツは、日本の重要な同盟国であった。いずれにしろ、『ドイツ戦歿学生の手紙』が学生たちのあいだでベストセラーになったのは事実である。訳者の高橋健二は戦後の1953年になって、この本が当時、いかに正しく、つまり吉野源三郎の意図どおりに受容されたかを強調している。

同じ訳者が、フライブルク大学のヴィットコプ教授編の「ドイツ戦没学生の手紙」を訳出したのは、丁度十五年まえであった。当時は日華事変のたけなわで、軍国精神のいやが上にもあおられていたころであったので、第一次大戦の際ドイツ帝国に殉じた学生の表白は異常な感激をもって日本の青年に迎えられた。国内はもとより、外地の戦場からも、訳者に感想を寄せられた青年の数は少なからず、個人的なつながりを持つようになった人々さえあった。しかし、ドイツ学生の愛国的な精神だけが日本の青年を感動させたのではなかった。一応はそうであったけれど、次第に、塹壕のなかでファウストを読むドイツ学生の姿、カロッサの「ルーマニア日記」に見るように、砲煙のなかにあっても、絶えず自然に目を開き、自分の魂を凝視する瞑想者の精神が、日本の青年をひきつけるようになったのであった。民族の誇りと愛国の熱情にもかかわらず、祖国のあり方に対し、反省的にならずにはいられなかった点で日独の学生は共通な悲痛な運命を体験したのである。それが両者を深い沈潜に誘った。あまりにも大きな犠牲ではあったけれど、その犠牲は無意義ではなかった。彼らは自己と祖国とを見る目を開かれたからである。第一次大戦の「ドイツ戦没学生の手紙」が、日本の学生の手紙を集めた「きけわだつみのこえ」の機縁となったことは否めないであろう。そして、第二次大戦のあとでは、日本の学生の手紙のほうがさきに出版された¹⁰⁾。

ここで「塹壕のなかでファウストを読むドイツ学生姿」が「日本の青年をひきつけるようになった」とか、「第一次大戦の『ドイツ戦没学生の手紙』が、日本の学生の手紙を集めた『きけわだつみのこえ』の機縁となった」と言われるとき、実は具体的にひとりの青年が思い浮かべられている。それが、東京帝国大学理学部地理学科在学中に学徒出陣し、戦死した中村徳郎であった。中村の手記中の記述、

再び『ドイツ戦歿学生の手紙』を読む。何回繰り返して読んでもいい。此所〔兵舎〕に居て読むと殊に感激が深い。彼等は真摯だ。塹壕の中で、蠟燭の灯の下で、バイブルを読み、ゲーテを読み、ワグネルに想いを寄せる彼等は幸福である。寄せ得る彼等は¹¹⁾。

という部分は、『はるかなる山河に』、そして『わだつみ』第一集に採用されている。中村徳郎の弟で、わだつみ会の理事長を長く務めた中村克郎が、『ドイツ戦歿学生の手紙』を愛読したこの兄の遺稿を出版しようと思ったことが、『はるかなる山河に』編集へとつながっていったのだ。兄が外地に出征する前の最後の面会場面を、弟はこう記している。

そしてしばらくの時間の後、そばに立ち会いの兵隊がいなくなるときを見計らった兄は、

「日本戦没学生の手記だ」

と言って、上着の下から一冊のノートを出し、私に渡しました。表紙に一度書いたタイトルが一字一字、黒く塗りつぶされていました。

後から届いた兄からの手紙に「克郎に一時間なりとも会うことの出来たのはせめてものことでした。実際はその前日いなくなっているはずでした」とあります。兄はこのノートを手渡すことができ、もういつ死んでもいいという覚悟をしたのだと思います。

私はそれが何を意味しているか、すぐに分かりました。以前兄が愛読し

て、私に「これを読んでおけ」と渡してくれた岩波新書の『ドイツ戦没学生の手紙』^今度版だと思いました。今度版なんて、そんな言葉はないかもしれないかもしれませんが、その頃は第二次世界大戦という言葉はなかったように思います。

私は思わず夢中になって、

「こんな戦争で死んじゃ駄目だよ、兄さん。このまま殺されちゃ何も兄さんのしたいと思っていることはできないじゃないか」

と、大声で思わず怒鳴っていました。そばに立ち会いの将校がいるのも忘れて¹²⁾。(傍点原文)

中村克郎は終戦直後、この兄との思い出を胸に抱いて、『ドイツ戦歿学生の手紙』^今度版を出すべく、岩波書店の吉野源三郎を訪ねる。

吉野源三郎さんに会って、日記を見せたら、

「一週間ほど、読ませてくれ」

と言われました。

で、一週間ぐらいして伺ったら、

「これは非常にいい。でも、これでは量的に一冊の本にするには足りない。ドイツ戦没学生の手紙のように、大勢の手記、書簡を集めて出した方がいいんじゃないでしょうか。別枝さん〔東大出版部編集者〕とも相談して、ご検討ください」

と言われました。それで最初は「東大戦没者の手記」となったのでした¹³⁾。

結局、「東大戦没者の手記」は岩波からは出なかったのだが、周知のように、やがて編集された全国版の『わだつみ』はベストセラー、ロングセラーとなり、1982年に、古典として岩波文庫の殿堂入りを果たす。

とにかく、『はるかなる山河に』は、『ドイツ戦歿学生の手紙』^今度版の名

に値するものであった。第二次大戦後のドイツでは単純には反復されえなかった、第一大戦後の現象が、ここ極東の地でもう一度よみがえったのだ。すなわち、幽霊の帰還である。いや、幽霊は、どこの国でも率先して帰国させたから、より重要なのは、最初に戻ってきた幽霊たちが、上級学校の若い学生、当時としては同年齢者の2パーセントにも満たない少数派である高学歴者層の出身だったのを受け継いでいたことだろう。第二次世界大戦後のドイツではすでに、自国のエリートを優遇する元氣は失われていた。1961年にハンス・ベールによって編集された、第二次大戦による死者たちの手記や手紙は、全世界の全階層から集められ、いかにも（戦後ドイツ人ふう）にクサイが、「人間の声」と題されたのである。

第一次大戦の開戦がヨーロッパにおいて熱狂的に歓迎されたことは、よく知られている。とりわけ、どの国でも、若い学生たちが続々と志願兵となり、そして戦死した。モードリス・エクスタインズは、独英仏すべての国において、死傷者の割合は自由な知的職業出身者が圧倒的に多かったと、この最初の世界大戦の特徴を語るうえで強調している¹⁴⁾。第一次大戦は、史上初の思想戦であり、史上初のブルジョアたちの戦争であったが、もうすこし下種な言葉を使えば、史上初の高学歴者戦でもあったのだ。

問題となるのは、死者の数だけではなく、戦争を語る言葉の多さである。要するに、高学歴の兵士たちは、生き残っても死んでも、反戦でも愛国でも、まともな言葉で戦争を語ることができた、あるいは語りたがったということなのだが、やはりフィクションではない本物の死者の声が最も大きく聞こえてきた。ドイツでは『ドイツ戦歿学生の手紙』のほかに、ヴァルター・フレックスの『二つの世界をさまよう遍歴者』（1917）が戦中戦後、百万部以上を売り上げた。フレックスは、友人である学徒志願兵エルンスト・ヴルヒェ（実在の人物）の勇敢に戦う姿と死を描き、みずからも東部戦線で戦死した若い詩人であったから、『二つの世界をさまよう遍歴者』も、高学歴者の遺稿手記集である。因みに、ジョージ・モッセによれば、我らが総統の自殺を告げるラジオ放送で、この遺稿集のなかの、ヴルヒェ少尉が戦死する場面の

一節が朗読されたのだそうだ¹⁵⁾。してみると、ヒトラーは最後の最後まで幽霊にお世話になったということか。

もちろん、『はるかなる山河に』や『わだつみ』が、『ドイツ戦歿学生の手紙』と違う性格をもつことは、誰の目にも明らかだ。『はるかなる山河に』の編者がすでに、ナチスの計画した幽霊による電撃作戦に気づいている。

私達はこの本（『はるかなる山河に』）に似たものとして『ドイツ戦歿学生の手紙』を持っている。この本の多くの手記がこれについてつづられ一様に或る感激をもって読み終わった事をするしている。それはたしかに感激に値する本だ。しかし私達はそれよりもこの本を推したいと思う。ことに編集態度について私達はヴィットコップに数等まさると自負している。彼がドイツ至上主義を吹き込む事を主眼としたのに対して私達は人間性を強く出す事を目的とした。私達の編集した手記にはなるほど戦闘の激烈な情景はほとんどない。これは日本軍の比類ない嚴重な検閲制度によるものと考えられる。この点、『ドイツ戦歿学生の手紙』の方ははるかにいきいきとしているだろう。けれども、私達の指摘したいのはドイツの思想の貧困さだ。あのドイツの思想家達のはい出にもかかわらず若い人達のこの貧しさ。それこそ二十年をまたずにナチスの興隆を許した理由ではなからうか¹⁶⁾。

しかし、こういうことについては、それは、まあそうでしょう、としか言いようがあるまい。いずれにしろ死者の声は、万年伍長が証明してくれたように、生者の望むがままに聞こえてくる。

注目したいのは、戦後これほどまでに哀惜された学徒兵たちが、戦時中の軍隊、とくに陸軍のなかではあまり大事にされなかったということである。あるいは、学歴のない者にとっては、学徒動員も、優遇されていた層から、ようやくその特権が奪われたことの小気味好い一例だったのかもしれない。そもそも、『はるかなる山河に』や『わだつみ』において目を引く記述は、学徒兵が味方の軍隊のなかで違和感を覚える状況であり、それこそが、あま

りにもよく知られているように、日本戦没学生の悲惨の核心なのである。『はるかなる山河に』の編者も言っているが、敵との「戦闘の激烈な情景」が欠けているのは、むしろ不気味なくらいだ。『真空地帯』において内務班の腐敗を描いた野間宏の言葉、「それは初年兵の彼にとっては敵に対する闘いではなかった。それは日本兵に対する闘いであつた」(『顔の中の赤い月』)という言葉は、この連関でしばしば好んで引用されるだろう。

先に紹介した、戦没東大生の代表的存在たる中村徳郎も、弟の思い出によれば、軍隊のなかで散々殴られたらしく、面会時に顔ををらしていたこともあるという。一高時代に軍事教練の単位を取っておかなかった中村は、一高・帝大という当時のエリートコースにしながら幹部候補生にはなれず、二等兵のままだった。もっとも、たとえ見習将校になったとしても、そもそも日本の陸軍は、欧米と違って、「地方」における社会的地位や学歴が無効とされる「真空地帯」であり、古年次兵のほうが学徒将校より実力をもつ年功序列の世界なのだ。『ドイツ戦歿学生の手紙』を絶賛する中村の手記は、こう続く。

死骸の中から取出した手記に、決して敵を誹謗する文句がない、という記録は注目に値する。斯かる真面目な偉大な学生を有つ独逸民族の底力を羨ましく思う。

ドイツの戦没学生たちの言葉はのちに引用していくが、とりあえずここでは、学徒将校として戦う彼らが、軍隊のなかでそれ相応の権威と尊敬を獲得していたことだけは言うておこう。それは中村の口調からもじゅうぶん伝わってくる。

しかも、「決して敵を誹謗する文句がない」という部分が、ひょっとしたら「決して**味方**を誹謗する文句がない」だったかもしれないのである。本拙稿とは直接関係ないので詳しく触れるつもりはないが、中村克郎は、わだつみ会の内紛によって理事長を無理やり辞めさせられたあと、兄徳郎の遺稿が

「改ざん」されているとして、1998年8月に、わだつみ会と岩波書店にたいし、『新版きけわだつみのこえ』の出版差止を請求する裁判を起こした。「敵」か、それとも「味方」かも、そうした「改ざん」の一つなのだが、これについて、わだつみ会の校訂委員長は、「問題は、第一次世界大戦時の『ドイツ戦没学生の手紙』の読み方にかかわることであって、旧版・新版の双方に共通する読み方、「敵を誹謗する文句がない」以外には考えられぬことである」¹⁷⁾と反論している。たしかに、その通りであり、この部分は、フランス兵の死体から取りだした手記のなかに、敵であるわれわれドイツ人にたいする罵詈雑言がなかった、というドイツ人学生の記述に由来していると思われる。だが、日本の学徒兵が直面した現実を思うと、「決して味方を誹謗する文句がない、という記録は注目に値する」、ああ、なんと羨ましいことか、と読んだほうが正しいような気すらしてくるのである。すでに述べたように、「決して敵を誹謗する文句がない」ことは、『わだつみ』のほうの特徴であり、星野義郎の言葉を借りるなら「敵軍不在の死への決意」という奇妙な事態が、日本人学徒兵の悲劇をかたちづくる¹⁸⁾。

ここで、「戦後思想」を再検討する小熊英二の『〈民主〉と〈愛国〉』を、すこし覗いてみたいのは、この大著もしくは太著で最初に強調されるのが、「戦後思想」が「戦争体験」と分かちがたく結びついているということであり、そして、その意味で最も重要な「戦争体験」の一つとして、『わだつみ』に残されたような「学徒兵の体験」が挙げられているからである。しかも、この「学徒兵の体験」は、「戦後思想」人の代表格である丸山眞男や大塚久雄にも見られるのもので、「知識人の戦争体験の、いわば一つの縮図」となっている、と小熊は言う¹⁹⁾。

そうした体験をひとことであらわすと、軍隊における、大衆のエゴイズムとの遭遇である。小熊も挙げている、『わだつみ』からの例を借りれば、「いっしょに入隊した同輩のあまりに激しいエゴイズムとみにくさへの不感症——精神と肉体との——には、ぼくは予想以上の大衆への嫌悪に悩まされた。彼らを人間だと思いたくなかった」²⁰⁾ というわけなのである。あるいは、「大

衆の愚劣と平凡と息切れのする臭気の波」²¹⁾ といった表現も、つい自己検閲してしまう、現在の文化人にはちょっと使えないものかもしれない。ここでは、大衆という言葉で以って、農民出身兵や下士官、少尉候補者上りの職業軍人²²⁾や無学層出身の応召兵などが指されているのだろう。中年補充兵として召集された大岡昇平も、『俘虜記』のなかで、「いかにも私は昭和初期に大人となったインテリの一人として、所謂大衆に対する嫌悪を隠そうとは思わない」²³⁾ と述べている。もっとも、さらに興味深いのは、大岡がアメリカ軍の捕虜収容所で、ある程度の位置を得るとき、成城高校・京都帝大という学歴ではなく、ミッションスクールである青山学院中学でうけた、当時としては特権的なネイティブ英語教育とキリスト教教育が物を言いはじめるところであろうか。

繰り返せば、当時、高等教育をうけた男子の数はきわめてすくなかった。丸山眞男は、兵隊に召集されたときに学歴別に並ばされて「大学卒などは、大多数の小学校卒の国民にたいしては雲の上的存在になってしまう」ことを改めて思い知ったという。「私はこの時程、自分が国民から孤立しているという感じを持ったことはありません。広い庭に沢山集まっている壮丁の中で高等専門学校以上の出身者は、本当にひと握りしかいませんでした」²⁴⁾。

しかし、反対に、このエゴイスティックな（と見なされた）大衆は大衆のほうで、学徒兵に代表される「雲の上的存在」のエゴイズム（と大衆が感じたもの）に憎悪の目を向けていたので、学徒兵が第二に遭遇したのは、大衆のルサンチマンと嫌がらせである。「“大学がなんだい、そんなもの意味ねえや” こういう人は率直に自己の腹を語る人である。しかし、かく高飛車に出られると意地でも大学を価値づけてみたくなる。しかし軍隊は星〔階級〕の世界である。南十字星を仰ぎつつ、小生一脈の哀愁を感ぜざるをえない」²⁵⁾ と、ある東大生は記している。京大哲学科に入学した直後に学徒兵になった梅原猛も「労働者や小作農たちが、学生によって象徴される特権階級出身である私達にどんなに反感を抱いているかを学んだ」²⁶⁾ と言っているが、この種の、軍隊におけるインテリ憎悪の話は、『わだつみ』に限らず、枚挙

に違がないという常套句がびったりしすぎるほど多いし、のちに触れるが、1950年版の『わだつみ』映画は、これを中心として作られているとさえ言える。もちろん、『ドイツ戦歿学生の手紙』にはまったく登場しないもので、この有無が、日独の最も大きな差異となっている。

加藤周一は、しかし「手記を残した学生が、当時の学生の多数を代表していたのではないということ」²⁷⁾に注意すべきだと強調する。これはいまではよく指摘されることだが、高橋健二の言うところの「民族の誇りと愛国の熱情にもかかわらず、祖国のあり方に対し、反省的にならずにはいられなかった」学生たちはむしろ知的な少数派だったのだ。「筆者の知っていたかぎりでの東京帝国大学医学部及び文学部の学生の大多数は「政治に無関心」であった。ということは、〔大衆と同じように〕みずから検討することなしに、戦争宣伝の記事をそのまま鵜呑みにしていたということである」²⁸⁾、と加藤は言う。われわれもまた、ここで、学徒兵の政治への関心や知的の高潔さを云々するつもりはない。経験と常識から見ても、高学歴男性のすべてが「知的」かつ「政治的」に敏感であるわけではないこと、いや、それどころか……は明らかだろう。そうではなくて、東大や旧制高校に代表されるような上級学校のソフィスティケートされ隔離された小世界から、エゴイズムが素直にのびのびと表現される外部に放りだされるということを、学徒兵やインテリ補充兵に広範囲に共有された体験と見なしたいのである。

敗戦直後の『はるかなる山河に』や『わだつみ』のヒットは、このどちらがエゴイストであったかという問題をめぐる、味方同士の戦闘において、第一回戦は学徒兵のほうが勝ったことを示している。これについては次章で詳述することになるが、死んだ学徒兵たちはエゴイストではなかった、彼らこそ真に祖国と国民を思って無私無欲で戦ったのだ、と死後はじめて承認されたのである。誰がエゴイストでなかったかという重大な問題を前にしたら、戦争が侵略であったかなかったかなど、まったく問題にならない！ ついでに言えば、もう一度（だけ）、このエゴイズムをめぐる戦いで学生が勝利するのは、大学生たちの無私無欲の行為が感動と支持とを集めた安保闘争の時

である²⁹⁾。さらに付け加えると、戦前の「アカ」学生をめぐるセンチメンタルな物語は、前哨戦といったところだろう。

南海に消えた中村徳郎は、一高ドイツ語教師であった竹山道雄の『ビルマの豎琴』の主人公、水島上等兵のモデルだとも言われている。この兵士はエゴイストの対極にいる人物だ。水島上等兵も、もし死んだのならば、幽霊として堂々と帰還しただろう。だが生き残った彼は、自分ひとりだけ生者として帰るわけにはいかないと、鎮魂のためにビルマにとどまるのである。『さけわだつみのこえ』は、最初の題名候補として、中村徳郎の手記中の言葉、「見ていてごらん、今に私たちの時代が来る」が挙がっていたということだ³⁰⁾。そう言えば、安保闘争における「中村徳郎」とも呼べる東大生、樺美智子の遺稿集の題名は、彼女の詩句「ただ許されるものならば、最後に人知れずほほえみたいものだ」から取られて、『人知れず微笑まん』だったか。

戦士はどこにいる

さて、小熊英二は『〈民主〉と〈愛国〉』の第一章を、『わだつみ』のなかの言葉を引用しながら、次のように締めくくった。

崩壊した「国民どうしの人間らしい連帯」を、どのような新しい原理のもとに構想しなおすか。「灰塵の中から新たな日本を創り出すのだ」という戦死した学徒兵の遺稿の言葉は、敗戦に直面した多くの人びとに共通の思いであった。

「戦後」とよばれる時代は、ここから始まる³¹⁾。

ヒトラーもまた、のちに两大戦間期と呼ばれることになる「戦後」、誰がエゴイストであり、誰がエゴイストでないか、誰が連帯を壊してしまい、誰が新たなドイツを創りだしうか、を大いに問題にしたものだった。ただし、この味方同士の争いは、農民兵士と学徒兵のあいだではなく、ユダヤ人とアリア人のあいだで、共産党とナチス党のあいだで起こった。「義務の勧告者

としての我らが死者」たちの示した「共同体への奉仕」「全体社会への犠牲能力」に比して、「ユダヤ人を導くものは、個人のあからさまなエゴイズム以外のなにものでもない」とヒトラーは叫ぶ³²⁾。ナチスの「来たるべき憲法」ではこうだ。

ある物の価値は、そのためにどれだけの犠牲を捧げられるかということ
で決まる。最高の犠牲は、しかし命を投げ出すことである。ゲルマン的観
点から見て民族共同体のために成し遂げられうる最高の功績は、民族共同
体のために武器をとって戦うことである。その能力を、ドイツ男性は兵役
において獲得し、どれだけの能力があるか、兵役のなかで試され承認され
る³³⁾。

もっとも、この種の、いかにもナチス・ドイツといったような（それゆえ
にかえってつまらない）発言が重要なのではない。ヒトラーに見られる、誰
が戦士で、誰が戦士ではないか、誰が無私無欲の犠牲的精神の持ち主で、誰
が卑しいエゴイストか、といったこだわりじたいは、敗戦後の大衆の在り様
について「無気力なパンパン根性やむきだしのエゴイズムの追求」³⁴⁾とあま
りにも正しすぎる批判を下した丸山眞男に代表されるような「戦後思想」の
論客たちにも観察されるし（「パンパン」を「ユダヤ人」に変えれば、立派
なヒトラー語録になる）、これは要するに、「男兒」たるものの、あるいは
「国民」たるものの定義に関わることなのである。このこだわりなしに、司
馬遼太郎が国民の人気を得られるか、2・26事件が映画化できるか、プロジェ
クトXが制作できるか。ここで、もう一度だけ、これで最後になるが、小熊
英二の「戦争体験（戦後思想）」論から引用させてもらおう。小熊は註のな
かで、自分の著作の性格をこう説明している。

本書が扱うのは、戦後日本における、ナショナリズムと「公」をめぐる
言説である。これはいわば、「天下国家」をめぐる言説、俗な表現をすれ

ば「男子いかに生きるべきか」をめぐる言説であると言ってよい。〔……〕読者のなかには、本書で検証されている論調において、「武士道」「男らしさ」「パンパン」といった言葉が頻出することに、いささか辟易する向きもあるかもしれない。〔……〕

またこれも本書で明らかにするように、「武士道」や「男らしさ」といった言葉づかいには、戦争と敗戦によって傷ついた戦後日本の男性知識人の心情が反映されている。いわば本書は結果として、戦後日本の男性知識人の言説と心情を検証した、一種の男性学という側面をもっているかもしれない³⁵⁾。

誰が戦士か、誰がサムライか、をめぐる男の闘いが、実際の戦争という事柄に直面して最も激しくなるのは、当然であろう。通俗的な太平洋戦争記などには、サムライという言葉が氾濫しているし、欧米人が日本人兵士を好意的に、あるいはありきたりに形容するときにも、この言葉が登場する。『戦場のメリークリスマス』の原作となった小説は、映画ではビートたけしが演じた下士官を、西欧的教育によってゆがめられていない日本古来の武人と見なしている（下士官体質のなかに天皇制ファシズムの元凶を見た丸山眞男が聞いた泣く）。

ヨーロッパでは、貴族の特権であった戦士のイメージが、どの階層まで広がってゆくか、下ってゆくかということが、重要な意味をもっていた³⁶⁾。それは、最終的には革命運動の戦士、労働運動の戦士に到達するだろう。第一次大戦とは、各国において、高学歴ブルジョア層が戦士の地位を占めることを証明した出来事だったのだ。『ドイツ戦歿学生の手紙』はその証明の記録である。ある学生は、友人宛の手紙のなかで、ゲーテの言葉を引用しつつ、平和な隠遁的生活は「理想」であるけれども、われわれはその「理想」をエゴイズムとして捨てさらなければならないのだ、と述べる。

君の手紙の中の一箇所に結びつけて書くが、「ゲーテの夕べの歌の中の

『憎しみを持たずに世に隠るるものは幸いなり』という句が僕の未来の理想としてもう可なりしっかり固まっている。」ねえ、君、これこそ僕自身の抑え難い理想であるだけ繰返し撃退しているものなんだ。それは利己主義だ。諦めかも知れない。恐らくは断念だ。しかしどっちみちこの理想を我々は攻撃しなければならない。生活は戦いだ。国民のための戦いと君は言うだろうが、人類のための戦いと僕はいいたい。辛いものだ。我々は屢々戦いに飽きて、休息したくなる。しかし屈服することは出来ない。常に軍人であり、全体のための戦士であることは我々の義務だ³⁷⁾。

あるいは、ドイツでベストセラーになった『二つの世界をさまよう遍歴者』(1917)のあとがきに引用されている、亡き著者の、両親宛の手紙ではこうだ。この戦士ももはや、眼前の戦争なぞとは無関係な、人類のための戦士である。

僕はきょう、あの最初の日と同じほどに、心のなかで志願兵となりました。僕は、多くの人たちが考えているのとは違って、ナショナリズムの熱狂からではなく、道徳的な熱狂から、戦いに志願したのであり、現在もそうです。僕が主張するのはナショナリズムの要請ではなく、道徳の要請なのです。僕がドイツ民族の永遠性やドイツ精神の世界救済的使命について書くとき、それは、国家のもつエゴイズムなどとはまったく関係ありません。そうではなくて、たとえ敗戦になろうとも——あるいはエルンスト・ヴルヒェなら、一つの民族が英雄的に死ぬ時と言うのでしょうか——実現されうる道徳的な信念が問題となっているのです³⁸⁾。

ドイツでは教養市民層と呼ばれた高学歴ブルジョア層が戦士の地位をこなにも気高く、あるいは傲慢に独占できることが、日本の学徒兵たちを魅了し、羨ましがらせたわけである。それに、日本を含む産業資本主義国の世紀転換期を席卷した青春という自己主張が、戦争を背景として、さらにみずみ

ずしくなっていることも、羨ましいかぎりだ……。

しかし、ここで決定的要素なのは、このドイツ人戦士たちの戦争が負け戦であったことなのである。「重大なのは犠牲的精神であって、何のために犠牲が捧げられるかということではありません」³⁹⁾ と、あるドイツ人戦没学生は言う。たとえばアメリカ人（現代の、でもよい）がこんなことを言っても、たんにひとを白けさせるだけであろう。負け戦ゆえに、かえって無私無欲と「民族共同体」（あるいは人類全体）への真の奉仕が悲劇的に強調されるのだ。この効果を、ひょっとすると総統閣下よりも、我らの学徒兵たちのほうが、よく心得ていたのかもしれない。『ドイツ戦歿学生の手紙』と『わだつみ』を秘かにつなぐのは、この無私無欲の礼賛、そしてそれによって、断じて無私無欲ではなかった戦争が隠蔽されることなのである。

映画評論家の佐藤忠男は、少年飛行兵として戦争に関わった経験をもつが、自分自身の心や、一般的な庶民、そして大日本帝国の指導者たちを動かしていたのは、もちろん、国家の大義に殉ずる犠牲的精神ではなく、それぞれの物質的利益を求める「力づくの欲ばり主義」だったと言う。だから反対に、「日本はまったく無欲で、ただアジアの解放のために自分を犠牲にして奉仕しているにすぎない」と声高に主張され、「天皇こそは無私無欲のシンボルである、という信仰が新たな意味をもって確立された」⁴⁰⁾ のではないのか、と。自分の狭い経験範囲では、『わだつみ』に描かれたような気高さを備えた学徒兵にはついぞお目にかかれなかったが、それでも、こうした「力づくの欲ばり主義」が横行するなかで、「戦争とは無私無欲の死を美しいと見る視点によって肯定されるべきものだ、という日本浪漫派的な思考方法は、ある程度まで、彼ら〔学徒兵たち〕の共通の教養になっていたのだろう」⁴¹⁾ と、佐藤は推測する。われわれは、こうした学徒兵の心情に影響を与えた、もう一つの、ドイツ経由のロマンチズムとして『ドイツ戦歿学生の手紙』を挙げることができるだろう。そして敗戦後には、学徒兵たちの「無私無欲の死」が、国民にとって、戦時中の無私無欲神話（もっともあのかただけは戦後もずっと無私無欲の「シンボル」にとどまったが）と同じような効果をもった。

それが『わだつみ』の受容である。

だが、繰りかえし言えば、戦時中は学徒兵の「無私無欲の死」の意義など、彼らの出陣を涙と一種の性的熱情で見送るために雨の神宮競技場に集まった、当時のエリート女子学生たち以外には、あまり認められなかった。第一次大戦時のイギリスでも、パブリックスクール出身の若者が大挙して志願兵（まさにボランティアだ）となるが、この現象を支えたのは、国家の危難を救うのはパブリックスクール出身者のリーダーシップであり、英国ジェントルマンの義務感であると、自他ともどもに認めていたことであった⁴²⁾。上級学校の学生が進んで戦場に向かうことは、悲惨事でもなんでもなく、誇るべき義務の遂行なのだ。つまり、例のノーブレス・オブリージュというやつである。ノーブレス・オブリージュとは、意地悪く言えば、地位のある者はそれだけの義務を負うということではなく、その義務遂行の高貴さが、他者から承認・称賛されるということなのではないか。もっと意地悪く（正しく）言えば、その称賛を本人も知っているという幸福ではないのか。

日本の学徒出陣じたいが、こうした西洋的なノーブレス・オブリージュを借りてきたものであったと言えるだろう。だから、東条英機は学徒出陣壮行会でこう叫んだ。「敵米英においても、諸君と同じく幾多の若き学徒が戦場に立っているのである。諸君は彼らと戦場に相対し、気迫においても戦闘力においても、必ずや彼らを圧倒すべきことを私は信じて疑わざるものである」⁴³⁾。だが、学徒兵のノーブレス・オブリージュなど、大日本帝国陸軍では、ただ冷笑を以ってのみ迎えられた。あるいは、西洋的な教養を身につけているはずの日本の高学歴者たちが西洋的なノーブレス・オブリージュだけは身につけていないという軽蔑的認識が、以前から陸軍には根強くあったと考えたほうが、東条の言葉は理解しやすいかもしれない。ある学徒兵は、士官学校出の青年将校に言われた侮蔑の言葉を書きとめている。「諸子は泥柳である。泥柳のように諸子は弱虫である。弱虫の第一は予備兵、その第二は幹部候補生である」⁴⁴⁾。

ちょうど第一次大戦最中の1916年ころ、当時の陸軍参謀次長だった田中義

一は、日本の高学歴者のエゴイズムを懸念して次のように述べたという。国民の犠牲的精神を育てる教育に関して高等教育にはまったく期待できない、と。

教育程度高き者にして、犠牲的精神に乏しく軍事思想の幼稚なるは、学校教育上大いに顧慮を要する問題なり。独逸国平時に於ける統計に依れば、年々一年志願兵たるの資格を有する学生の約九分の五は、一年志願兵に採用せられ、軍隊教育を受くるに反し、我が国中学校卒業生三万八千余人に対し（大正五年調）一年志願兵採用数は四千八十人にして、軍隊教育を受くる者僅々九分の一に過ぎざるを以て、教育ある国民の犠牲的精神の涵養、軍事智識の増進は、之を中学校教育に、而して其の基礎は実に小学校教育に期待せざるを得ざるや明かなり⁴⁵⁾。

ドイツ帝国から取りいれた制度であった一年志願兵制度は、日本では1927年に幹部候補生制度に変わるのだが、いずれにしろ、旧制中学卒以上の学歴を有する者はすくない労力で将校になれるという優遇措置で、制度の恩恵に与れない者や職業軍人にとっては、高学歴者が苦しい軍隊生活から自分だけ調子よく逃れようとするための抜け道のように見えたらしい。だが、人も羨む優遇措置にもかかわらず、日本の高学歴者は軍隊を嫌ったし、そもそも軍隊のなかの階級や出世になぞ重きを置かなかった。それで、兵役を逃れつづけた高学歴者が、第二次大戦中の総動員体制のなかで、丸山眞男東大助教授のように年を食ったインテリ下級兵になったわけである（その意味で、丸山眞男二等兵は歴史的存在であろう）。ドイツ帝国では、ギムナジウムの六学年以上の修了者に一年志願兵の資格が与えられたが、兵役を経て予備役将校になっておくことは、ブルジョア階級の高学歴男性にとっては名誉であったので、日本に見られるような、高学歴者の兵役忌避のメンタリティは19世紀にはすでに消えていたという⁴⁶⁾。

こうした高学歴者による戦士の寡占状態にストップをかけようとしたのは、

むしろナチスなのである。第一次大戦中・大戦後、そして第二次大戦中のドイツにおいて、ドイツ人兵士が犠牲的精神を発揮して戦ったというイメージを最も派手に振りまいたのが、「ランゲマルクの神話」であった。1914年11月、フランドルのランゲマルク西部の部隊が、のちの国歌となった（ただし現在のドイツでは歌うことを禁じられている）「ドイツドイツ世界に冠たるドイツ」を歌いつつ、正々堂々、騎士らしく逃げも隠れもせず敵陣に突撃し、イギリス軍の塹壕を占領したという神話である。もっとも、実話だとしたら、敵陣占領どころか、全滅するしかない無謀な行動なのだが。

ランゲマルクの戦いを題材とした劇や詩は、いやというほどたくさん書かれ、11月11日は「ランゲマルクの日」となって式典が催され、ランゲマルクの戦没者墓地には「われら死すともドイツは生きよ」と刻まれたわけだが、ここで注目しておきたいのは、このような尊くも馬鹿ばかしい犠牲死を死んだ兵士たちが、上級学校の生徒たちだったということが神話の不可欠の要素になっていたことである。しかし、実際は、ギムナジウムや大学の学生は、教師をその数に入れても、18パーセント程度であったという⁴⁷⁾。ナチスは、「ドイツ大学生のランゲマルク募金」を「ドイツ青年のランゲマルク募金」と名称変えてみるなど、数々の対策を打ち出して、なんとか「ランゲマルクの神話」から上級学校を払い落とそうとしたが、目的を果たしえなかった⁴⁸⁾。なにしろ、ヒトラーには学歴も家柄もなかったし、良家のボンボンたるチャーチルに「ボヘミアの伍長」と軽侮されつづけた男だったのだから、そして自分もまた西部戦線のフランドルにいたのだから、「ランゲマルクの神話」が大学生たちに独占されるのを快く思うはずがない。

日本では1940年に『ドイツ魂』と題された戦死者書簡集が翻訳出版されるが、これは、ドイツ人編者によれば、正しいドイツ語で書かれているわけでもなく時には地方訛りを丸出しにした庶民兵たちの手紙であり、ナチスの戦争犠牲者扶助会の助力によって集められ出版されたものであるという⁴⁹⁾。原題はたんに「ドイツの兵士たち」であったところを、「ドイツ魂」としたあたりは、日本人訳者のほうがよほどナチスの気持ちをよく汲んでやっていた

のかもしれない。しかし、『ドイツ魂』は『ドイツ戦歿学生の手紙』のように話題にはならなかった。

ところで、日本で、この「ランゲマルクの神話」に相当するものと言えば、やはり肉弾三勇士であろう。肉弾三勇士の映画や芝居が作られ、朝日新聞は歌を募集し、師団の地元では三勇士饅頭まで売り出されたという。ただし、この話の要点は、「ランゲマルクの神話」とは逆に、1932年の上海事変において見事な犠牲死を遂げた三人の下級兵士たちが、無学な炭鉱夫・農民・漁師であり（山・田・海に等分されているところが神話らしい）、貧しい家の出身だったことなのである。

しばしば、日本とヨーロッパとの大きな違いとして取りあげられるように、我が国では、社会の上層部の子弟が幼年学校や士官学校を経て、現役陸軍将校への道を歩むケースはすくなくかった。ヨーロッパの将校団が貴族と上中層ブルジョア階級出身者から成っていたのにたいし、そしてたとえばイギリスでは、1890年から1939年の士官学校生徒の八割はパブリックスクール出身者であったのにたいし（チャーチルもそのひとりだ）、大日本帝国の幼年学校生は、中下層、とりわけ農民層の出身が多かったのである。1910年にはすでに、幼年学校生のなかの士族率は約三割まで低下し、帝国大学入学者の士族率のほうが高くなる⁵⁰⁾。大雑把に言えば、都会のインテリ上層部の子弟は旧制高校・帝大のコースを望むので、成績優秀だが、官費で学べる軍関係の学校に行く、あるいは行かざるをえない層は、おのずと決まってしまうというわけだ。昭和前期における陸軍（軍学校出身者）と高級官僚（帝大出身者）との対立やメンタリティの相違が、ここに根ざしていたことも、戦中日本の特徴としてよく指摘されるとおりである。

誰が戦士か、という争いは、ドイツ（欧米）においては、士官学校出身の将校とブルジョア教養層のあいだにも、ブルジョア教養層と農民・大衆層のあいだにも起こりえなかった。前者の場合は、両方ともに戦士であることは明らかであったし、後者の場合は、農民が戦士でないのは明らかだった。ナチスは、ドイツという「民族共同体」に属する男性全体を、階層にかかわら

ず、階層の差を越えて、戦士として認めたがっていただけなのである。むしろ、反対に、この「民族共同体」に属そうとしない者は、それだけですでにエゴイスティックな自由主義者か共産主義者かユダヤ人となる。

それにたいして、軍隊と高学歴層とのあいだに繰りひろげられた、誰が戦士か、という争いを抜きにして、『わだつみ』の内容も、この手記集の熱狂的受容も考えられない。旧制高校・帝大のコースを歩む者は、自分たちこそが戦士、サムライだと思っていたし、じじつ、サムライ魂の伝統は、若い書生の気概、旧制高校（とりわけ一高）の精神にこそ引き継がれたと言ってよいだろう。その書生＝士族精神を説明するのに、江藤淳が戦後、皮肉にも、アメリカの特権的な「男だけの全寮制大学」において感激とともに体験したものを引き合いにだすのがいちばんよい。

彼ら〔プリンストン大学生〕は、戦後日本でいう「学生」という概念より、かつての日本にあった「書生」という概念に一層近いような連中らしかった。

私は、ふと自分が明治時代に投げかえされたような幻覚を感じた。士族出の、あるいは新しい知的士族たらしとする「書生」たちが、ウェブスターの辞書を前にして、いわば *learnings in the Nation's Service* を想っていたあの時代——つまり、私は、そのときほんの一瞬の間ではあったが、周囲に士族の雰囲気というべきものを感じたのである。が、それは単に、あまりにも反士族的なものが充満している東京から来た私が、異質の学園に触れて、自分のなかに眠っていたなにかを喚び覚めされたために感じた幻覚だったかも知れない。幻覚であるにせよ、それは快い体験であった。私は、ここには依然としてあり、戦後の日本からは消え去ってしまったある精神を想った。私は、両の眼に涙がにじみ出て来るのを感じた⁵¹⁾。

「戦後の日本からは消え去ってしまったある精神」を、たとえば、『はるかなる山河に』のなかの次のような記述に見てもよいのかもしれない。肉弾三勇士作戦である特攻隊（人間魚雷）に志願した和田稔は中村徳郎と並んで、

わだつみ東大生の象徴的存在であるが、手記のなかで、母校の一高について、こう記しているのである。

第一高等学校に於ける教育は天下無比なりき。独立自歩、毅然として聳ゆるあるを感じず。一言いはばその精神は志士の精神なりき、志士の精神は闘争の精神なりき⁵²⁾

しかし、この「志士」たることは、敵軍アメリカにではなく、味方の軍隊に誇示されなければならなかった。『わだつみ』は英訳も独訳もされているが、『真空地帯』に描かれた陸軍内務班の実態が、ついに欧米人には理解されなかったように、日本戦没学生の心情もまた真には伝わらなかったのではなからうか。あえて言えば、反ナチス戦士たちの神話が特権層と結びつけられることがあるから、その点では、同じファシズム敗戦国のドイツの理解は得られるかもしれない。

もっとも、この種の抵抗神話、つまり戦士が反体制側にあるということは、むしろ日本で好まれるようだ。第二次わだつみ会の事務局長であった（そして理事長の中村克郎とは対立していたらしい）ドイツ文学者山下肇は、東大を繰り上げ卒業させられ、陸軍予備士官学校に入らされたという学徒兵経験をもつが、この士官学校の一部の仲間がいまだに、士官学校時代を「われらの唯一の青春」として賛美するのを、あきらかな軽蔑をこめて非難している。

これは一つには、同世代人の一部に、一般の学生生活よりもこの軍学校の方がむしろ自身の能力が予想外に発揮できて成績上位を占めることのできた人びとがいたためかもしれない。彼らはここで思いがけない名誉を受け、志願して職業軍人への道を選びもした。〔……〕私がすぐ思い浮かべるのは、第一次大戦後ドイツのワイマル共和制時代、左右両派五分五分の覇権抗争の続くなかで、ついにヒトラーのナチスが暴力的に制覇し、第二次大戦に突入していく歴史である。そのナチス党員の主力は第一次大戦から

復員した不満分子の下級将校と下士官出身者であった。そして中世以来のプロイセン貴族出身の伝統的な職業軍人層はおのずからこれとは職種を異にし、第二次大戦下でも、ことごとくにナチスと対立抗争を深めていくのである⁵³⁾。

たしかに、この文章は、普通に読んでも、いくぶんいやらしいところをもち、保阪正康の『「きけわだつみのこえ」の戦後史』は、山下肇と対立した中村克郎理事長側の視点から、「わだつみ会は、本来知識人の結集体だったのに、中村さんは、これを錯覚してあまりにも大衆化させすぎた。大衆化というのは、わだつみ会のなんたるかも知らない連中が入ってきてかき回したからだ」という山下肇の発言を、「差別的」だと激しく非難もしている⁵⁴⁾。しかし、山下の姿勢のほうが、本来の「わだつみの声」あるいは「反ナチス的」特徴をあざやかに打ちだしているのだ。すなわち、われわれこそが高貴な戦士だったという逆転の構造である。

無援の裸像

繰り返えし言えば、この戦士は大衆から孤立していた、いや、「独立自歩、毅然として聳ゆるある」を望んだ。だから、1950年にわだつみ像を制作した彫刻家の本郷新の言葉は、「わだつみの声」の受容について正しく述べたものであっても、「わだつみの声」を正しく聞きとったものではない。

この像を作るにあたって私の頭を去来したのは、「わだつみの声」は戦没した学生によって語られ、叫ばれたのでありますが、その内容はひとり学生のみに関することではなく、多くの労働者、農民、市民をはじめ、女性によっても叫ばれた人権の尊厳、生命の価値に関する問題であるという考えでした。それで「わだつみの声」を具体化するには、金ボタンの学生姿でなければならないという考え方にはどうしてもなれず、といってボロボロの軍服を着た死に瀕する兵隊でもものたりない。そんなことから私は

一人の美しい肉体をもった青年の裸体の中に、すべてを内包させようという考えに落ちつきました⁵⁵⁾。

というわけで、わだつみ像は、公共の場に置かれる彫刻としては我が国では珍しく、性器まで備えた青年の全裸像である。この像が、東大構内に設置されるのを拒まれ、1953年末にやっと立命館大学に建立されることになり、しかし1969年の学園紛争のさなかに、日帝の侵略戦士の象徴として引き倒された経緯についてはここでは触れない。

注目しておきたいのは、第一次大戦後のドイツに数多く建立された戦士像のなかで、なぜか大学に飾られたものに全裸像が多かったことである。そのことを指摘したジョージ・モッセの言葉をそのまま引用しておこう。「古典主義的な伝統に則ったモニュメントにおいてさえ、兵士の大半は完全に着衣だが、時には直接的にギリシャ人を模した。時代を超えて類型化されてきた裸体の戦士である。そうした彫像は大学の記念碑にしばしば見られる。伝説的なランゲマルクの戦いで死んだ学生をはじめとする義勇兵が発揮した男らしい理想を表すのであろう。例えば、ミュンヘン大学の戦争記念碑は全裸の槍兵、ボン大学では剣を頭上に掲げる裸の青年が屹立し、ドレスデン工科大学では裸体の戦士がまさに戦わんとしていた」⁵⁶⁾。

わだつみの裸像は、屹立や戦闘とは程遠い、ちょっと説明し難い妙なポーズをとっているが、ドイツの大学に登場した男性のたくましい裸像は槍や剣をもち、まさに男性的屹立をあらわす、ギリシャ時代以来の戦士である。男性裸体は、その人間が生まれながらに備えている特権性を際立たせるということで、大学生の戦士にこそ、男性器つきの全裸はふさわしいのである。

しかし、本郷新が、わだつみ像から学生服も軍服も脱がせてしまったのは、ことによると、いくぶん皮肉めいたものになったかもしれない。学徒兵の苦しみは彼らが学生服を脱がされ、彼らだけが楽しんできた特権的な劇の舞台から引きずりおろされたことから生まれてきたからである。

ここで、すこし遠回りして、日本における、高学歴者たちへの、あるいは

上級学校への根強い不信感について触れておきたい。『わだつみ』への当時の熱い共感も、まるで、かつての不信感の埋め合わせであるかのようだ。そして今度は、タブーとして封印されていた、戦没学生への批判のちに出てきたときにも、まっさきにそのエリート主義が批判された。むろん、こうした批判は、どうしても月並み、あるいは朝日新聞的になる。

『わだつみ』の聖典視からエリート主義批判への移行を最もよくあらわしているのが、1950年版の『わだつみ』映画と敗戦五十周年記念のリメイク版の相違であろう。最初の映画の主人公格の学徒兵が、やたら気高い東大生と三高生（現・京大）であるのにたいし、1995年版では中心人物の出身校は明治大学（ラグビーだ！）になっている。また、1950年版は、ふたりの中年補充兵のシーンからはじまるが、ひとりとは東大仏文科の助教授、もうひとは、花沢徳衛がはまり役で演じる庶民兵であり、前者の高潔さと後者の狡さが、露骨に対照的に描かれているのだ。この助教授のモデルは、『わだつみ』に有名な序文を寄せた渡辺一夫であろうが、渡辺には軍隊経験がないので、丸山眞男も思わせる。東大助教授二等兵が上官にいじめぬかれるのを見て、三高生は、教育のない軍人たちは「僕たち教育あるものが憎いんだ」などという台詞まで吐く。言うまでもなく（？）、リメイク版では、こうした学歴的対立や嫉妬は消されてしまった。そのかわりに、上級学校にも軍隊にも庶民にも属さない脇役、サーカス出身で孤児である勇敢な上等兵を登場させる。要するに、彼は、懐かしくも月並みな、マージナルな英雄なのだ。

たしかに、先に引用した和田稔の一高讃歌なども、人間魚雷という極限状態を斟酌してやらなければ、かなりイヤミなエリート主義かもしれない。それにたいして、丸山眞男の言葉を借りると「いつも国民意識とマッチしていたのが陸軍だった」し、そこでは「地方」の社会的地位や家柄なんかは（皇族をのぞいて）ちっとも物をいわず、華族のお坊ちゃんが、土方の上等兵にビンタを喰らっている」ような「擬似デモクラティックなもの」があったというわけなのである⁵⁷⁾。

竹内好は、軍部の教育への介入にたいして最後まで反抗したのが、官立の

学校、とりわけ、一高を頂点とする旧制高等学校だったことを指摘しつつ、「ただ、その抵抗が孤立していて、民衆と結びついたものでなかったことも認めないわけにはいかない」と言う。

もし官立学校流の自由主義教育に世論の支持があれば、民衆を背景にした抵抗を組織することが可能だったはずだが、そのような事例は（京大事件がやや例外かと思われるが）皆無だった。民衆はむしろ自由主義に反対する軍の支持に傾いていた。ここに日本の自由主義の悲惨さが見られるわけだが、教育の問題としていえば、過去の自由主義教育がいかに根のないものであったかの証明にもなる。

このことは、逆に軍隊教育が世論の支持を得ていた、ということには直接にはならない。一般教育制度の中で的高等教育が、世間から冷たい眼で見られ、無言の非難を浴びていたために、軍隊教育が支持を得た恰好になったというだけだ。民衆は、高等教育から直接の恩恵を蒙っていない。大学が自分たちの生活の利益を守るものとは考えない。ところが、軍隊は、彼らの生活に直接触れている⁵⁸⁾。

竹内好は淡々と述べているが、これは近代日本の根本的な悲惨さに触れてしまう重要な指摘である。「冷たい眼」や「無言の非難」は、第一には、自由主義的な高等教育をうけた者はきっと自己の利益だけを考えているエゴイストにちがいないという例の疑念から、第二には、自分だって状況が許せば高等教育を受ける可能性はあったのに、という嫉妬から生まれてくるのであろう。したがって、これは、日本の高等教育が、むしろ欧米と違って、原則的には万人に開かれていて、インテリが「大衆」と分離していないことから来るのである。

先ほどから、なるべく軍隊ではなく、陸軍という言葉を使ってきたが、周知のように、日本では圧倒的に数の多かった擬似デモクラティックな陸軍と、少数精鋭という自負をもつ擬似リベラルな海軍がことごとく対立していた。

その対抗意識の一つとして、志願制を採る海軍が学歴と出自を重んじ、イギリスをはじめとする欧米型の貴族的将校団を目指していたことも、しばしば言われることである。しかし、日本の学生層がそのままブルジョア中産階層に重なるわけではないために、第二次大戦中に大量の学生上がりの予備役士官が海軍に入ってきたときには、むしろ海軍士官としての品位の欠如が問題になったらしい。つまり、日本の大学生は帝大生も含めて、すでに戦前から「大衆」でもあったのだ。この点について、元学徒兵である安岡章太郎は次のように述べている。「英国なら大学に行くことのない階層の子弟でも、日本では経済的な事情が許せばどんどん大学にいくし、その大学もイギリスとは違って、とくに日本の私立大学はオックスフォードやケンブリッジのように名家の子弟を集めたエリートの養成機関というわけではない。したがって、そういう大学から採用された予備学生たちは、旧日本海軍を痛く失望させ」た⁵⁹⁾。私学出身の安岡が卑下して言うほどの状況ではないにしろ、家柄や階層を問わない平等空間であるということは、大日本帝国陸軍の特徴である以上に、まずは高等教育機関の特徴であった。

高等教育をうけた者が「大衆」から分離していることは、ヨーロッパでは、あまりにも自明なことなので、竹内好が言うようなかたちで問題になることは考えられない。たとえば、『ドイツ戦歿学生の手紙』のなかの次のような記述を見てみよう。

最近僕は掩蔽部の中で、ひどく僕を面喰わせると同時に喜ばせたことを経験しました。僕は戦友の一人からゲーテの詩を借り、昼食後——というのは夜の十一時でしたが——それを読みました。すると、部下の一人である商人が、少し朗読してくれと言いました。僕は丁度シュタイン夫人あての詩の一つ「君知り給えり、わが性をくまもなく」というのを読んでいました。その商人は婚約していたので、恐らく一層感じやすくなっていたのでしょう。僕は手短かにゲーテの生涯とワイマルの公園とゲーテの家などの話をしやり、それにあてはまる詩を読みました。僕が読んでいると、一人また一人と寝てい

る穴から匍い出て来て、傾聴しました。そこには工場労働者や作男などがいたのですが、いくら読んで聞かせてもゲーテに飽きないのです。[……] 一時に僕はやめました。でなかったら、彼らはもっとながく傾聴していたでしょう。掩蔽部の中は一つの気分に溶けていました——ゲーテに対するこんな感激を僕はまだ味わったことはありません⁶⁰⁾。

もちろん、ドイツの庶民たちのほうが文化的教養度が高い、とか、ゲーテは大衆にまで浸透している国民詩人だ、などということがここで言われようとしているのではない。このドイツ人学徒将校は、「大衆」の心の内なぞには実はまったく無関心で、自分のゲーテへの感激だけに埋没できるほど堂々としているということなのだ。わたしはあくまで観察する人であり考える人であるが、「大衆」の目から自分が観察されるという可能性は考えもしない。『二つの世界をさまよう遍歴者』では、学徒将校たちが「庶民兵の考え方や感じ方に影響を与えることは難しいか簡単か」⁶¹⁾ ということをめぐる論争する。答えがどちらになろうとも、自分が影響を与えるような上部に立っているという前提は同じなのだ。日本の学徒兵にも特権意識は十分あったのだろうが、こうした堂々たる鈍感さほもちあわせていなかった。先ほどの竹内好の言葉をすこし変えれば、高等教育をうけた者が「世間から冷たい眼で見られ、無言の非難を浴びてい」る事実そのものではなく、高学歴者がその「眼」を意識してしまうことが問題なのだ。

それを如実にあらわしたのが、『戦没農民兵士の手紙』をめぐる論争である⁶²⁾。題名が『ドイツ戦没学生の手紙』に由来していることから明らかなように、これは、1961年に同じく岩波新書になった、岩手県の農村出身の兵士たちの書簡集である。戦没東大生よりも、戦没農民のほうが早くに、ドイツ戦没学生に続いて、天下の岩波新書に迎え入れられたわけなのだ。『戦没農民兵士の手紙』をめぐる知識人たちの間の異常な反響と、教訓過剰な読後感の氾濫⁶³⁾ と、反対に、農民の純朴さ（と言われるもの）に例のごとくたちまち恐れ入ってしまう文化人たちにたいする批判は、いまでも容易に想像

できる日本の光景であろう。それにしても『ドイツ戦歿学生の手紙』は、なんという広範囲な影響を、我が国に及ぼしたことか。

継続と断絶

唐津順三も『わだつみ』を考察するにあたって、『ドイツ戦歿学生の手紙』と比べずにはいられない。日本の息子たちが「何をしても」とか「とにかく」という言葉を以って、自分の気持ちの正直な説明を断ち切ってしまうのに反し、ドイツにおいては息子たちが、親にたいして「実にフランクであけすけである」と唐津は言う。「ここには、言葉による交通がある。友達以上に相互に十分に解り合いうるという前提がある」。

西欧の後進国ドイツにおいても、親と子は同一の文化層に属し、同一の教養を身につけ、そこに秘密のないことがうかがいしれる。ここには「何をしても」も「とにかく」もない。というのは、後進国日本には、まだありありと、親と子との間に思想上の溝があるということである。或は、親の理解と認識を絶したことを子が考えているということである⁶⁴⁾。

唐津の言う「実にフランクであけすけ」な態度は、われわれが時おり西洋人夫婦や親子にたいして感じる演技臭さとも見られるし、何より『ドイツ戦歿学生の手紙』の書き手たちは青年運動の世代、つまり青春の自己主張によって世代対立が激化した世代に属しているので、親子の対立は、むしろ当時のドイツ帝国では大きな問題でもあった。しかし、ここでの唐津の分析の鋭さは、ブルジョア教養階層特有の文化や心性が、後進国であるために英仏に比べると階級社会的要素のすくないドイツにおいてすら、親から子へと受け継がれるべき遺産となっていることを正しく見抜いていることのなかにある。日本が階級社会ではないことは、しばしば指摘されるが、それでも、佐藤俊樹の『不平等社会日本』（2000）以来、社会学者のあいだの議論の種となっているように、所得や地位の格差は歴然とあり、しかもそれが固定的に継承

されていくという現象が見られないわけではあるまい。だが、特権的と見なされた階層特有の文化やモラル、とりわけそれを子に伝えようとする意志や努力が欠けているという点では、日本には階層はない、いや厳密に言う必要がある、階層のもつ無形の独占遺産はないのだ。現代では、ますますその傾向が強まっていることは明らかである。

というのは、そうした特権的な階層の役割を、かつての日本では、高等教育もしくは学歴が代わって担っていたと言えるからである。あるいは、もっと積極的に、高等教育と身分文化との結合こそが近代日本の一大特色であった、とすら言えるかもしれぬ。つまり、高等教育によって受け継がれていく心性やモラルが戦前までに育ちつつあったが、江藤淳が涙ながらに嘆くように、敗戦後、徐々に消えていった、と。そのさい、とりわけ、いまは亡き旧制高等学校が決定的な位置を占めていたことは事実であるし、その独特のエトスと心性については、さまざまな場所で、時に籠城主義と呼ばれ、時に蛭カラと呼ばれ、時に教養主義と呼ばれ、懐旧の情にやさしくくるまれながら、取りあげられているので、もはや触れまい。これは、たとえてみれば、一つの排他的な劇なのだが（旧制高校の諸風習や運動部の伝統を見よ）、そのこと自体に問題があるわけではない。排他的な劇というなら、それはパブリックスクールにも当てはまるだろう。ただ、そうしたシナリオと劇に乗れる者たちだけが味わえる高揚は、学校共同体の範囲内（広がっても、せいぜい、エリート旧制高校生たちの蛭行を暖かく見守る高校城下町）にしか通用しなかった。竹内好の言う、近代日本の「根」の無さが露呈する。ここで、前章において、学徒兵の苦しみは、彼らだけが楽しんできた特権的な劇の舞台から引きずりおろされたことから生まれてきた、と言っておいたのを思い出してほしい。

それでは、その彼らだけの劇を支えたものは何か。何度かめの繰り返えしになるが、戦士の精神と共同体への帰属意識によって、エゴイズムという近代の病を克服することなのである。

そもそも、近代の上級学校生徒の男らしい諸生活には戦士ロマンチシズム

の比喩があふれており、その点においては日本も欧米に引けを取らなかった。「男児」と「国民」たるエリートを育てる上級学校において、どの国家であろうとも、エゴイズムの克服が第一義の問題とならないはずがなかろう。大正末期に出版され、昭和10年に非売品として復刊された『一高魂物語』は、主に運動部の対抗試合と自治寮生活の様子を描いているが、一高軍、旧都遠征軍（三高との試合のために京都に行くこと）、柔道部戦士、向陵剣士、独眼野次將軍といった言葉で飾られている。

一高に於いては対外試合は、寮生全体の戦いであった。戦士はその指標であるだけだ。戦う者、応援する者、一高に於いては、之れ皆、同じ戦いを戦う一団の火であった。熱であった⁶⁵⁾。

これは、パブリックスクール、もしくはパブリックスクール・ストーリーの学寮対抗試合をめぐる言説そのままである（『ハリー・ポッター』はその伝統を受け継いでいる）。自治寮という制度と団体スポーツの精神を、旧制高校はパブリックスクールから取り入れた。そこでは、ラグビーやクリケットなどの団体スポーツをと^{ゲームインシヤフト}おして、^{カメラート}共同体にたいする犠牲的精神と戦友たちとの友情が育まれるとされたのである。そして、第一次大戦時の大英帝国の学徒志願兵にとっては、戦争じたいが、こうした、自己犠牲とフェア・プレイの精神を以って戦われるべき団体スポーツ試合の延長であったという⁶⁶⁾。From playing-field to battlefield⁶⁷⁾ というわけなのだ。

片やドイツ帝国のギムナジウム出身者にとっては、従軍はワンダーフォーゲル、すなわち生徒たちだけの徒歩旅行だったのである。それは、Führer（ワンダーフォーゲルのとき先頭を歩く青年、のちにヒトラーに与えられた呼称）を先頭に、みなが力を合わせ、困難を克服してゆく楽しい遠征と^{キャンプ}野営であった。ワンダーフォーゲル（ドイツ青年運動）が本格的に開始された直後の1902年にすでに、当時の代表的な改革教育家であったルートヴィヒ・グッリットが、この運動は「兵役のための予備学校」になりうるとして絶賛し

ているという⁶⁸⁾。ワンダーフォーゲルは学校外の活動であるが、これは、個人競技の体操トッルネンの時間はあっても団体スポーツを授業としてもっていなかったギムナジウム教育の「欠陥」を結果的に補うものであったから、その意味で、ギムナジウム批判者グルリットの指摘は正しい。因みに、ナチスが、将来の指導者（Führer）養成のために創立した、通称ナボラという寄宿舎学校では、パブリックスクールを見習って、共同体意識の育成のために、団体スポーツが取り入れられた⁶⁹⁾。

実際、『ドイツ戦歿学生の手紙』の邦訳者である高橋健二が「砲煙のなかにあっても、絶えず自然に目を開き、自分の魂を凝視する瞑想者の精神」と言っているように、手紙のなかには、ワンダーフォーゲル的な自然描写と内省もすくなくない。あるいは、邦訳は抄訳なので、そのような部分が特に選ばれたといったほうがよい。

かつて徒歩遠足のリュックサックのなかにゲーテの詩集を入れていったように、ドイツ人学徒兵たちは、背囊のなかにツァラトゥストラをつめこんだ。パブリックスクール生として従軍したロバート・グレーヴズの自伝『さらば古きものよ』（1929）によれば⁷⁰⁾、パブリックスクールには一種の反文学主義があって、詩を書く少年なぞ馬鹿にされるのが落ちだったということなのだが、それにたいして、青年運動世代のギムナジウム生たちは自然愛好と文学趣味に包まれていて、それがそのまま、ゲーテやニーチェやリルケやヘッセとともに、旧制高校に流れこんで、教養主義と呼ばれ、戦時中は若い高学歴者の心の支えとなった。戦場に本を携えていくという行為は、わだつみ学徒兵のシンボルともなり、1950年版の映画では、モンテーニュの『エッセ』（渡辺一夫へのオマージュとはいえ、奇妙にフランス寄りになっている）が、95年のリメイク版では、まさに『ドイツ戦歿学生の手紙』と『万葉集』（日本浪漫派への示唆）が外地まで運ばれる。

ワンダーフォーゲルとのさらに明確な結びつきを提示するのは、ドイツ人学徒兵たちのバイブルとなった『二つの世界をさまよう遍歴者』である。遍歴者と訳しておいたが、これは Wanderer なので、まず題名からして、そ

うなのだ。5月のさわやかな天気の中かで、どこに到着するか分からぬままに東部戦線へと移動することは、楽しいワンダーフォーゲルなのである。湖があれば、素裸となって飛びこみ、美しい草原に横たわって、風と太陽で身体を乾かす。そして、ひとたび戦闘となれば、Führer たる学徒将校は兵士たちをかばい、「いつでも先頭を切って塹壕から飛びだし、戻ってくるときは最後の人となる」⁷¹⁾。

こうなると、先に引いた中村徳郎の言葉を借りて「斯かる真面目な偉大な学生を有つ独逸民族の底力を羨ましく思う」としか言いようがないのだが、とにかく、彼らは、自分たちの反エゴイズムの劇が戦場において、他者によって否定されてしまうという感覚はもたなかった。イギリスやドイツの上級学校の制度と心情の、しかもその最良の部分を、こんなにも健気に受け入れてきた日本の上級学校の学生にとっては、軍隊は自分たちの特権的な劇の断ち切られる場であったというのに。

もちろん、実際の戦争の過酷さは、若い心と命を打ちのめしたにちがいない。そこに日独の差も独英の差も、第一次大戦と第二次の差も、そして劇の継続と断絶の差もなかる。現に、生き残った欧米の若者たちは、のちにロスト・ジェネレーションと呼ばれるのである。「西洋の没落」が取り沙汰され、堅牢に見えたブルジョア世界は「昨日の世界」となったと嘆かれる。本稿の守備範囲外のこととなるが、たしかに、ヨーロッパには一つの大きな終わりが、あるいは、終わりの始まりがあった。

だが、ここでまず問題としたかったのは、『ドイツ戦歿学生の手紙』が戦争の実態ではなく、ブルジョア教養層の心性を映しだしているように、『はるかなる山河に』や『わだつみ』から浮かびあがってくるのも、実は、戦争の悲惨さとか、若者の死の悲しみなどではないということなのである。そうではなくて、われわれは、そこに、近代日本において上級学校に行くとはどういうことであったのか、を見てしまうのだ。このことは、1950年の『わだつみ』映画にも当てはまるが、しかし、すでに述べたように、1995年にリメイクされた映画では、そうした要素は消されており、日本において上級学校に

行くとはどういうことなのか、というのが、もはやテーマになりえないことをあざやかに示すだろう。その意味で、『わだつみ』映画は、『ゴジラ』映画から戦争の傷跡が徐々に消されてゆくのはちょうど反対に、敗戦五十年を経てはじめて、戦争映画、いや反戦映画になったのである。

幽霊の帰還は報われた……。

註

- 1) 長尾靖生「ゴジラはなぜ南から来るのか」『怪獣はなぜ日本を襲うのか』（筑摩書房，2002年）を参照されたい。民俗学者の赤坂憲雄は『別冊宝島 怪獣学入門！』（1992）において、ゴジラは南方で死んでいった兵士たちの怨念の化身であると言っている。赤坂は、ゴジラが皇居を避けて突き進んでいくことに注目し、その意味で、三島由紀夫の『英霊の声』との類似を指摘する。なお最初に、ゴジラが「“海からよみがえってきた戦死者”の亡霊”であることを指摘したのは、川本三郎である。「ゴジラはなぜ「暗い」のか」『今ひとたびの戦後日本映画』（岩波書店，1994年）所収，を参照。
- 2) ジョージ・モッセ（宮武実知子訳）『英霊』（柏書房，2002年）86頁参照。
- 3) *Kriegsbriefe gefallener Studenten*. hrsg. v. Prof. Dr. Philipp Witkop. München (Georg Müller Verlag) 1933, S.6. フィリップ・ヴィットコップ編（高橋健二訳）『ドイツ戦歿学生の手紙』（岩波書店，1938年）9頁。訳文をそのまま邦訳本から借りてくる理由については、註の37)を参照されたい。なお書名としては「歿」の字を使うが、文中では「戦没」に統一した。
- 4) 『わが闘争』の原文は、インターネットで公開されているものを利用し（<http://www.ety.com/berlin/kampf.htm>），訳文については一部、角川文庫版（平野一郎・将積重訳）を参照したので、以後、角川文庫版の頁数を示す。『わが闘争』上291～293頁。
- 5) Peter Sloterdijk: *Kritik der zynischen Vernunft*. Bd.2, Frankfurt a.M. (surkamp) 1983, S.760. 訳文に関しては、高田珠樹訳『シニカル理性批判』（ミネルバ書房，1996年）を一部参照した。
- 6) 高橋哲哉「記憶・亡霊・アナクロニズム」『戦後責任論』（講談社，1999年）74頁。
- 7) 同書，79頁。
- 8) 『わが闘争』下445頁
- 9) 吉野源三郎『職業としての編集者』（岩波新書，1989年）16頁。
- 10) ヴァルター・ベール／ハンス・ベール編（高橋健二訳）『ドイツ戦没学生の手紙』（新潮社，1953年）「訳者のまえがき」6頁。これは、高橋が、第二次大戦版のドイツ戦没学生の手紙を訳出した折の言葉である。しかし、この書は、第一次大戦版と比べると、熱狂と感動を以っては迎えられなかった。同じ編者による、戦没者手記集『人間の声 第二次世界大戦戦没者の手紙と手記』（高橋健二編訳，1962年河出書房刊）については、本文を参照されたい。
- 11) 『はるかなる山河に』（東大協同組合出版部，1948年）145頁

- 12) 『兄の影を追って 託された「わだつみのこえ」』(岩波ブックレットNO.370, 1995年) 19頁。
- 13) 同書, 33頁。
- 14) モードリス・エクスタインズ(金利光訳)『春の祭典 第一次世界大戦とモダン・エイジの誕生』(TBS ブリタニカ, 1991年) 260頁。
- 15) ジョージ・モッセ, 前掲書, 208頁。
- 16) 「失われなかった人間性」『はるかなる山河に』227～228頁。
- 17) 藤本治「「わだつみ訴訟」の虚と実」『世界』(岩波書店, 1999年9月号) 234頁。
なお、中村克郎の側から見た「わだつみ訴訟」については、阪元正康『「きけわだつみのこえ」の戦後史』(文藝春秋, 1999年)に詳しい。
- 18) 星野芳郎『「きけわだつみのこえ」について』『星野芳郎著作集第8巻』(頸草書房, 1979年) 10頁。
- 19) 小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉 戦後日本のナショナリズムと公共性』(新曜社, 2002年) 50頁～57頁参照。
- 20) 『きけわだつみのこえ 第二集』(岩波文庫版) 178頁。
- 21) 『はるかなる山河に』62頁。
- 22) 少尉候補者制度とは、徴兵によって入隊した一般兵士が職業軍人となるために設けられた、陸軍の制度である。海軍では特務士官と呼ばれた。この制度による将校(しばしば下層の出身者)に典型的なメンタリティについて、元学徒兵は次のように言う。「この特進制度によって一兵士から将校になった中本大尉のような職業軍人の精神構造が陸士出身者に対する羨望と劣等感, 兵士, 下士官に対するエリート意識, 幹部候補生制度に対する侮蔑感という複雑な組立によって成立するのは, 制度自体の孕む必然であった」。田中艸太郎「戦争体験・論の試み」『火野葦平論』(五月書房, 1971年) 263頁。
- 23) 大岡昇平『俘虜記』(新潮文庫版, 1997年) 78頁。
- 24) 丸山眞男「近代日本の知識人」『後衛の位置から』(未来社, 1982年) 78頁。
- 25) 『きけわだつみのこえ 第二集』(岩波文庫版) 165頁。
- 26) 梅原猛「京都学派との交渉私史——天ぶらと哲学」『思想の科学』(1959年8月号) 35頁。
- 27) 加藤周一「戦争と知識人」『日本人とは何か』(講談社学術文庫版, 1976年) 186頁。
- 28) 同書, 211頁。
- 29) 小熊, 前掲書, 530～539参照。

- 30) 中村克郎, 前掲書, 36頁参照。ただし, これはメンデルの言葉の引用であり, 徳郎の手記の原文は「…今に私の時代が来る」である。
- 31) 小熊, 前掲書, 65頁
- 32) 『わが闘争』430頁。
- 33) Helmut Nicolai: *Grundlage der kommenden Verfassung*. Berlin (Reimar Hobbing) 1933, S.63f.
- 34) 丸山眞男「日本のナショナリズム」『丸山眞男全集第5巻』(岩波書店, 1995年) 67頁。
- 35) 小熊, 前掲書, 832頁。
- 36) Cf. Gerald N. Izenberg: *Modernism and Masculinity. Mann, Wedekind, Kandinsky through World War I*. Chicago and London (The University of Chicago Press) 2000, pp.6-13.
- 37) *Kriegsbriefe gefallener Studenten*. S.132f. 訳文は, 当時の学生が読んだそのままを伝えるために高橋健二訳を採用したので, 訳書の頁数を併記する。『ドイツ戦歿学生の手紙』75頁。
- 38) Walter Flex: *Der Wanderer zwischen beiden Welten*. Kiel (Orion-Heimreiter) 1986, S. 121f.
- 39) *Kriegsbriefe gefallener Studenten*. S.21. 同翻訳書, 19頁。
- 40) 佐藤忠男「差別としての美」『ユリイカ』(青土社, 1975年10月号) 89頁。
- 41) 同論文, 91頁。
- 42) Cf. Peter Parker: *The Old Lie. The Great War and the Public-School Ethos*. London (Constable) 1987, p.21.
- 43) 蜷川壽恵『学徒出陣 戦争と青春』(吉川弘文館, 1998年) 147頁参照。
- 44) 田中艸太郎, 前掲書, 283頁。青山学院大学卒業後に見習士官となった山本七平も, 陸軍が, 別に確たる理由もないままに, 最後の最後まで学生を信用しなかったことを指摘している。「ただ「インテリは兵隊に向かない」は, 軍だけではなく, いわば国民共通の常識で, 日華事変のころ朝日新聞に「インテリ兵士ははたして弱いか?」と言ったテーマの記事がある。内容は「必ずしも弱くない」と言った趣旨だが, こういう記事が出ること自体, 「インテリは兵士に向かず, 学生は軍人に適さない」という常識があった証拠だろう」(山本七平『一下級将校の見た帝国陸軍』文春文庫版29頁)。このような「常識」は欧米では考えられないが, まさしく近代日本の一大特徴であり, 『わだつみ』の背景である。
- 45) 田中義一発言の引用は, 原田敬一『国民軍の神話 兵士になるということ』(吉

川弘文館, 2001年) 58頁, に拠った。

- 46) 望田幸男『軍服を着る市民たち ドイツ軍国主義の社会史』(有斐閣選書, 1983年) 145～161頁「一年志願兵と予備役将校への道」の節を参照のこと。
- 47) モッセ, 前掲書, 77～80頁参照。
- 48) Vgl. Uwe-K. Ketelsen: Die Jugend von Langemarck. Ein poetisch-politisches Motiv der Zwischenkriegszeit. In: *Mit uns zieht die neue Zeit. Der Mythos Jugend*. hrsg. v. T. Koebner. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1985, S. 87f.
- 49) ルドルフ・ホフマン編 (伊東鎮太郎訳)『ドイツ魂』(日本公論社, 1940年)「編集者の詞」参照。
- 50) これらのことについては, 広田照幸『陸軍将校の教育社会史 立身出世と天皇制』(世織書房, 1997年)の第三章「進学ルートとしての評価」第四章「将校生徒の社会的背景」を参照した。
- 51) 江藤淳『アメリカと私』(講談社, 1969年) 51頁。
- 52) 『はるかなる山河に』135頁。
- 53) 山下肇『学徒出陣五十年』(岩波ブックレットNO.317, 1993年) 40頁。
- 54) 保阪, 前掲書, 192頁。
- 55) 大南正瑛・加藤周一『わだつみ不戦の誓い』(岩波ブックレットNO.339, 1994年) 48頁。
- 56) モッセ, 前掲書, 108頁。
- 57) 鼎談「日本の思想における軍隊の役割」『日本の軍隊——日本文化研究の手がかり』『飯塚浩二著作集5』(平凡社, 1976年) 233頁及び228頁。
- 58) 竹内好「軍隊教育の問題性」『思想』NO.322 (岩波書店, 1951年4月) 350～351頁。
- 59) 安岡章太郎『僕の昭和史 I』(講談社文庫版, 1991年) 199頁。
- 60) *Kriegsbriefe gefallener Studenten*. S.240. 同翻訳書, 149～150頁。なお, 訳者の高橋健二は, この手紙の書き手であるヴィリ・ナウマンの名だけをわざわざ「訳者序」のなかで挙げ, 「総じて, 明日しれぬ戦場にあつて, 彼ら学生が精神に関することに如何に深く思いをひそめているかは, 悲壮な戦闘の記述に劣らず, 感動的である」とほめたたえている(3頁)。
- 61) Walter Flex, ebd., S.18.
- 62) このことについては, 赤沢史朗「「農民兵士論争」再論」『立命館法学 第271・272号』(2000年)を参照されたい。
- 63) 安田武「農民と知識人のあいだ」『戦争体験 一九七〇年への遺書』(未来社,

1963年) 165頁。

64) 唐津順三「自殺について」『唐木順三全集第三巻』(筑摩書房, 1981年) 330~331頁。

65) 藻岩豊平『一高魂物語』(非売品, 1935年) 292頁。

66) エクスタインズ, 前掲書, 173~183頁参照。

67) Peter Parker, p.95.

68) Vgl. Detlev Peukert: "Mit uns zieht die neue Zeit..." Jugend zwischen Disziplinierung und Revolte. In: *Jahrhundertwende. Der Ausbruch in die Moderne 1880-1930*. Bd.1.hrsg. v. A. Nitschke. Hamburg (Reinbeck) 1990, S.190.

69) Vgl. Horst Ueberhorst (Hrsg.): *Elite für die Diktatur. Die Nationalpolitischen Erziehungsanstalten 1933-1945. Ein Dokumentarbericht*. Königstein (Athenäum) 1980, S.54.

70) グレーヴスの自伝は、しばしばレマルクの『西部戦線異状なし』(1929)と並び称され、青春を戦争によって破壊された世代による反戦の叫びの代表とされるが、グレーヴスがブルジョア上層の出身でオックスフォード大学に入る直前に出征して学徒将校になっているのにたいし、レマルクとその主人公は中下層の出身で、小学校教師養成所の学生であり、われわれの視点からは、区別して論じられるべき作品となる。学徒志願兵たちの戦死を描いている『西部戦線異状なし』が、にもかかわらず、拙稿で取りあげられない理由も、ここにある。なお、ほとんど時を同じくして『ドイツ戦歿学生の手紙』の大増補版(1928)が出版されており、これは、『西部戦線異状なし』の悪影響に対抗するものとして、右陣営から大いに称賛されたという。Vgl. Tilman Westphalen: Ein Simplicissimus des 20.Jahrhunderts. In: Erich Maria Remarque: *Im Westen nichts Neues*. Köln (Kiepenheuer & Witsch) 2001, S.208.

71) Walter Flex, ebd., S.42.

Egoist and Warrior German School Stories at the Turn of the Century

Rieko TAKADA

This paper begins with an attempt to make clear how closely *Hear the Voice of Ocean-Spirits: Records of Japanese Students who Perished in War* (Kike Wadatsumi no Koe 1949) is related with *Letters of Fallen German Students* (*Kriegsbriefe gefallener Studenten* 1918). This is a collection of letters by German students who were killed in action during World War I. After World War II, *Wadatsumi* was made on the model of this German book, which had been translated into Japanese in 1938. By comparing the two books this article aims to examine the conflict between the masses and the intellectuals, which seems characteristic of Modern Japan.

In those days, *Letters of Fallen German Students* became a best seller among Japanese student soldiers, because they were attracted by the warrior ideal of manliness that German student volunteers had embodied. It was enviable for Japanese college students that the leadership and self-sacrifice of German students were recognized and admired by the German people.

In contrast to this, in Japan college students were often regarded as egoists without patriotism, though they themselves were confident that they represented the Japanese warrior ethos. It was a cry of isolation and disappointment in the army that Japanese students uttered in *Wadatsumi*, which has become a symbol of the postwar Japanese anti-militarism movement. Ironically, college students who had perished in war were set up as warriors against the aggressive war in the times of Japanese Fascism.